大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

<論説>経済観念

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002102

経済観念

西村孝夫

一

「経済観念」Economic Idea という語は、通例の用法としては「経済観念に欠ける」あるいは「経済観念がない」とか、「経済観念が薄い、強い」とかのように、節約的であるかないか、あるいは悪い意味でケチかどうか、という用例に示される。それほど日常的になった語を、あえてここで一つの学術用語として提起し、その論理的・歴史的な諸規定を確認しようとするのは、一つにはこの語のもつ日常的なひびきを重視し、他方で、学問的にはこの語の本来もつ広い概念内容を展示するためである。というのは、この概念は文字通り解すれば、本来「経済に関する観念」を意味し、決して「節約」や況んや「ケチ」などを意味する概念ではないのに、日本でも、あるいは諸外国でも日常では後者の意味に使われる例が多い。

さて「経済に関する観念」という時、「経済」と「観念」とがそれぞれ何であるかが判明していなければならない。端的にいえば、「経済」とは「物質生活の安定と拡大とを目指す人間の努力」あるいは「富裕への努力」（拙稿「思想・人間・社会」大阪府大経研第十三巻三号所収）であり、「観念」とは「ある対象を表示する心的存在の総称」（岩波哲学小辞典「観念」の項参照）である。したがって前者に関する一切の心的存在は「経済観念」であるということになる。決してそれは日常の用語のよ

うに、節約とかケチとかのみを意味していない。

ところで「経済に関する観念」は必ずしも単一な形態をとらない。極めて幼稚な観念から高度に体系化された観念の次元まで、様々の層あるいは類型を表示する。たとえば日本経済思想史研究の権威本庄博士は、「人の住むところ必ず衣食の途があり、社会が結ばれ、経済生活が営まれる。従って経済に関する思想は古くから存するものであり、何らかの形でそれがいい現わされる。文書のうちにあらわれた思想についても、その始めには個々の事象について、その折々に断片的に述べられていたにすぎないが、社会の発展・経済生活の進歩とともに、それらの思想が次第に体系的、または全般的に述べられるようになり、経済思想として統一あり連絡あるものとなってくる。このような時代にまで進んで来ると、〔社会経済に関する思想の研究が、一の学問の一部として討究されるのであるが〕、さらに進めば、経済に関する一の学問が成立するに至るのである」（『日本経済思想史研究』（上）、傍点及びパーレンは引用者による。パーレンの部分はやや意味が不分明である）と述べている。このさりげない叙述の中には、ここでのわれわれの行論に重要な暗示を多く含んでいる。まず、第一に、本庄博士のいわゆる「思想」は、必ずしも厳密な用語法に従うものでなく、行文の本旨からみて、むしろわれわれのここにいう「観念」に相当するものと考えうる。第二に、そうとすれば、その「経済に関する思想（実は観念）」が「古くから」存在し、また「何らかの形」をとる。いいかえれば経済観念には文書にあらわれるにせよ、あらわれないにせよ、様々の成層、類型をもつものであることが指摘される。これをかりに経済観念の論理的・心理的性格と名付けよう。第三に、経済思想＝観念は最初は「個々的・断片的」なものから、社会、経済の発展・進歩につれて、次第に「体系的、全般的」あるいは「統一あり連絡あるもの」に進化し、最後に「経済に関する学問」が成立する。すなわち、幼稚な形態から高度な形態に至る経済思想＝観念の進化には社会、経済の進歩・発展に相即するという歴史的・社会的側面が介在していることが説かれている。

このうち第二・三点はとくに重要な論点で、これを十分に展開・論議するのが本稿での主要目標である。第一点の「思想」と「観念」との差違と関連は第二点の経済観念の論理的・心理的な側面を論ずる際に明白となろう。

こうした経済観念についての主要論点に立入る前に、補足的に観念についてではなく「経済」について重点をおいて論じておこう。前に「物質生活の安定と拡大とを目指す人間の努力」というように端的に「経済」を規定したが、これは必ずしも筆者の独断的な解釈ではなく、マックス・ウェーバーも次のような解釈を示している。

彼は、最広義における経済現象に結びついている根本的事実として、「われわれの肉体的生存および極めて理想的な欲望の充足が、等しくどこでもそれに必要な外的手段の量的制限と質的不足につきあたるということ、それらの充足のためには、計画的な配慮と労働や、自然との斗争及び人間との結合が必要であるということ」(Weber, M., Aufs. zur Wiss. 1922. S. 161 富永立野共訳岩波文庫三二頁)をあげている。しかも彼は経済現象を、「狭義における経済的事象もしくは制度」i. e. S. Wirtschaftliche Vorgänge bsz. Institutionen と、「経済に関係ある現象」ökonomisch relevante Erscheinungen を、「経済的に制約された現象」ökonomisch bedingte Erscheinungen に分けている。(Ebenda, S. 162., 前掲邦訳、三三頁)われわれもこうした広い意味での「経済」を表象に思い浮べている。なぜならば、経済観念も時代が遡り、あるいは低次で幼稚なものになればなるほど、単に狭い経済的現象だけでなく、経済に関係ある、もしくは経済に制約された現象、すなわち民間信仰、政治、文芸、物語、芸能などと結びついた形で現われるから、狭義の経済現象にのみ制限する立場は役に立たないのである。

次にマルクスの場合も、経済はいつもいわゆる上部構造である様々のイデオロギー諸形態との関連のうちに把握され、しかも意識、精神は「一種の社会的産物」ein gesellschaftliches Produkt (Die Deutsche Ideologie, Dietz Verlag, 1953 S. 27)としてとらえられるから、やはり経済と経済に関する観念を広く解する立場をとっている。とりわけ、彼が意識を最

初は「最も手近かな感性的な環境についての意識」、「同時に自然についての意識」であると考え、いわゆる「単なる群意識」bloßes Herdenbewußtsein であるにすぎないが、自然発生的分業の進展に伴い、物質的労働と精神労働との分化が生ずると意識は自らを世界から解放して、純粋理論、神学、哲学、道徳等の構成へ移行することが可能となるといっている点(Ebenda, S. 28)は注目に値する。

それはともかく次に項を改めて、観念、したがって経済観念の諸成層、われわれのいわゆる経済観念の論理的・心理的側面を考察しよう。

二　経済観念の論理的・心理的側面

この問題に極めて示唆的な照明を与えるのが、丸山真男氏の注目すべき論文「思想史の考え方について」(武田清子編『思想史の方法と対象』所収)である。氏はこの中で、人間の観念のとりうる諸成層を次のように理解する。すなわち、思想のもつ次元は、「理論」・「学説」・「教義」などという極めて高度に体系化された形をとることがあるし、やや体系的ではないが、もう少し包括的な「世界観」・「人生観」・「人間観」などといった形をとるし、断片的ではあるが、より直接的・具体的な「態度」・「意見」、さらにもっと直接的な、生(ナマ)な「生活実感」・「生活感情」などの形をとる。さらに人間の意識下の次元に接続していくという。そして「この成層の上にいくほど体系性乃至抽象性のレベルが高い。下にいくほどそれは断片化されまた経験的な、生活に直接的に密着している度合が強い」(同書二九頁)と特色づけ、すべてのレベルで思想を問題にしうるといい、最後に極めて重要な発言をしている。それは「思想……に目標や方向性を与えるのは、相対的にこの成層の上のレベルにあるものである。つまり目的意識性、目的設定による方向性というものは上から下に向って行く、それに反して思想のエネルギーというか思想を推進して

いくようなエネルギーというものは逆に下から上に上昇していく」（同書二〇頁）ことである。この発言は、後に経済観念と社会層との関連をとり上げる局面で再び関説する必要があろう。

それはともかく、丸山氏は上とか下とかいうが、これは氏自身もいわれるように思想の価値評価の観点から見て体系的・抽象的な観念形態をすぐれた高い価値をもつものと見ているのではないことここで断わる要もない。ここに本庄博士の思想の歴史的形成過程の説明と、丸山氏による思想の論理的構造の分析とが、「思想」という概念を最も広い「観念」の形態でとらえている点がほぼ確認される（なお、清水幾太郎氏にも「匿名の思想」、すなわち学者、思想家の個人名が付された思想と区別された思想という把握がある、同氏「日本的なるもの」所収）。では本庄博士のいわゆる「個々断片的な思想」や丸山氏の「意見」・「態度」以下の「経験的、日常生活的」な観念諸形態をどう把握すべきであろうか。

この点で、われわれはドイツ観念論哲学の最高峰ともいうべきヘーゲルに遡及する要を感ずる。だがヘーゲルにおいても、その全哲学体系の中で、精神のとる様々な形態は必ずしも一義的にとらえられてはいない。例えば Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften in Grundrisse の第一部 Die Wissenschaft der Logik. §20 においては、感覚 das Sinnliche ——表象 Vorstellen ——思想 Gedanken、さらに概念 der Begriff という思惟の諸規定が取上げられ、後に立つものは順次にそれに先行するものを素材としつつ、個別性と外在性 die Einzelheit, ein Außereinander（その抽象的形式は並存および継起 das Neben-und das Nacheinander）を棄てて普遍性 die Allgemeinheit 自己関係 die Beziehung-auf-sich 単純性 die Einfachheit に立至るものと考える。（松村一人邦訳『小論理学』八〇—八二頁）ここでヘーゲルが個別性とか外在性とかいっているのが、先に述べた「断片的性格」の哲学的規定であり、普遍性、自己関係、単純性といっているのが体系的、抽象的性格を指していること

に注目されたい。しかし、第三部の Philosophie des Geistes §11 においては主観的精神の三つの主要な形態を ① 心 Seele ② 意識 Bewußtsein ③ 精神そのもの (Geist) としてとらまえており、まず「自然のなかにとらわれている精神・自己の肉体性に関係させられている精神・まだ自己自身のもとに存在しない精神・まだ自由でない精神」から始め、この精神が抽象的思惟によって媒介された実在性を獲得する過程をとらまえる（船山信一訳『精神哲学』上五八—六六頁）。さらに Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte の C Der Gang der Weltgeschichte において、人間の進歩を「意識の段階的序列」die Stufenfolge des Bewußtseins としてとらまえ、これを幼児から青少年、成人の段階になぞらえながら、「感性的な感覚」Sinnliche Empfindung から始まって、「一般的な表象」の段階に上り、次に「概念的な理解」の段階に上るという。（Die Vernunft in der Geschichte, 5 Aufl. 1955, S. 155 河野正通「歴史哲学緒論」二三〇頁）この過程は、マルクスによって、個人の社会からの離脱としてとらえられる歴史の進行に対応する観念の発展と一致することに注意を喚起しておく（経済学批判序説）。これらのヘーゲルによる感覚から意識を経て思想や概念に至る諸規定を用いるとすれば、われわれは感覚——意識——理論の三つの階程、さらにそれぞれの中間に、感情と思想とを補って、感覚——感情——意識——思想——理論という一つの観念諸形態の系列を考えることができる。感覚と感情を区別する根拠は次の通りである。すなわち、「感覚とは一定の感官性、一つの音とか一つの色とかを知覚することである。感情とは我々の心的状態の促進または妨害、すなわち快適な存在か反撥かの意識されることである。もし私は一つの物の香りや味を、また形や色や音を単に知覚するなら、我々はこれらの性質を感覚する。哀愁や希望や、喜悦や憎悪が普通の心的状態を高揚させ、或は下降させたと認められる状態になったら、私は感情しているのである。」「内的感覚と外的感覚とを区別するヘーゲル派の呼称より優れたものと考える」（ハンス・リック音楽美論（岩文）一二二頁）。次にまた「思想」をとくに一つの階程として定立

した理由は、通常、思想という時には比較的厳密な解釈が下されるからである。例えば、「日本経済思想史」の研究も、通例は徳川時代の経済思想から筆を起すのが慣わしになっていること、また思想の特質に関して「思想は論理の形式とコトバをかりて表現された人間の意欲のことである」（村田廸雄『反道徳の倫理』二二〇頁）というような解釈があることからそれが立証される。思想は通常狭く解釈され、むしろ広い意味での思想（丸山氏の用語例）は「観念」と呼ぶ方がよい。したがって、さきほど本庄博士や丸山氏が思想と名付けた最広義の解釈の下における思想を、われわれは「観念」と呼び、その観念の諸形態を、わざわざ感覚――感情――意識――思想――理論と考える訳である。すなわち丸山氏の用語法によれば、意識下の次元ないしこれに直接連る次元を「感覚」Empfindung, sensation とし、「生活実感」・「生活感情」などと呼ぶものを「感情」Gefühle, feeling, sentiment とし、「意見」・「態度」などを「意識」Bewußtsein, consciousness, conscience と考え、「人生観」・「世界観」・「社会観」などを「思想」Gedanke thought, pensée とし、「学説」・「理論」などを「理論」Theorie, theory, théorie と考えているのである。

もちろんヘーゲルもその精神哲学や論理学でいっているように、これらの諸成層の区別とその推移はあくまで弁証法的であって、これをシェーマ通りに機械的に現実の諸観念に適用することは慎まねばならない。このようにわれわれは観念を五つの成層に分けるが、それらを一応次のように整理して考えている。

① 感覚　Empfindung, sensation, sensation

これは現象に対する直接な感官の反応であって、最も断片的・具体的な観念である。あるいはマルクス流にいえば「最も手近かな感性的な環境についての意識」で「自然についての意識」あるいは「自然についての純動物的な意識」(Naturreligion) であるともいえる。しかもそれが「単なる群意識」として現われる理由は、「自然に対

する人間の局限された関係が彼等相互間の局限された関係を制約し、また彼等相互間の局限された関係が自然に対する彼等の局限された関係を制約する」(Die deutsche Ideologie, S. 27)からであり、レヴイ・ブリュルもこれを「集団表象」と呼んでいる(「未開社会の思惟」岩波文庫上二八頁)。

② 感情　Gefühl, sentiment, feeling

これは感覚にやや反省を加えて生ずる情緒あるいは前述のハンス・リック流にいえば「心的状態の促進または妨害」を意味する。ヘーゲルも指摘するように、感情は感覚をいわばその材料としてもち、次第に外在性を揚棄しつつ自己関係性へ移行する。集団や群の中に眠っており、かつ自然に囚われていた意識は個人的・私的な部分あるいは自然に対立する部分を感情として分出する。

(3) 意識　Bewußtsein, conscience, cnnsciousness

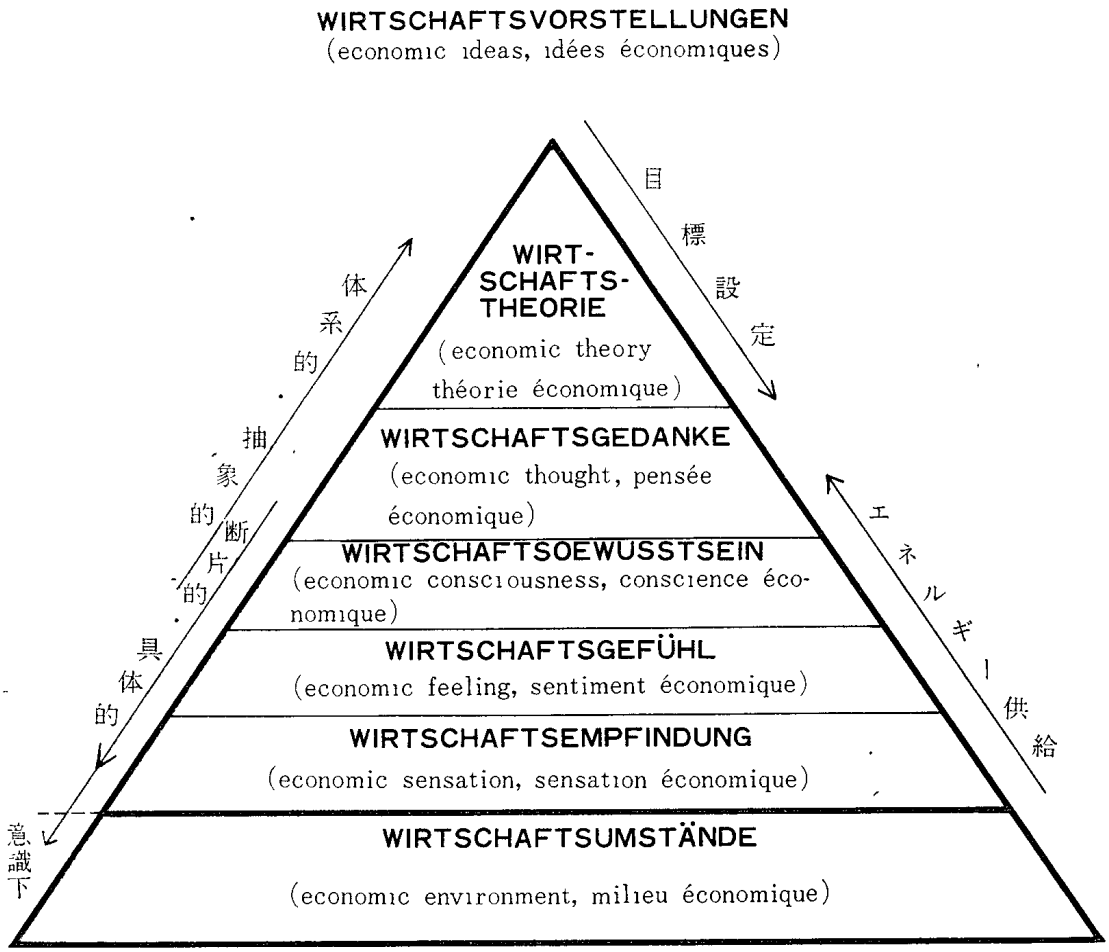
これは現象に対する自らの反応あるいは関係の自覚とその表現である。意見、態度などといわれるもので、社会や自然を含めて、個人の個人としての自立(ヘーゲルの自己関係性)がみられる。

④ 思想　(Gedanke, pensée, thought)

ここで狭い意味に限定された思想は、現象に関する思惟、思考の結果生じた包括的な(個別的なではない)内容を指し、論理やコトバという形式をとり、また個人名を冠せられる。「匿名の思想」(清水幾太郎氏)という発想法は実は意識以下の観念を表現しようという試みに他ならない。

⑤ 理論　Theorie, théorie, theory

現象に対する合理的・概念的な思惟とその所産である体系的・法則的な認識を指す。こう考えると、例えば丸山氏の「教義」を理論に入れることは不可能となってくる。なぜならば教義はいかに体系的であれ、多かれ少かれ



「非合理的」な要因を含むのであって、むしろ前の「思想」に含めるべきであると私考する。

こうして、①から⑤に行くにしたがい、観念は直接的・具体的・断片的・日常的・非合理的なものから間接的・抽象的・体系的・概念的・合理的なものへと次元を移行する。直接・間接というのは観念の主体個人が集団や自然や生産労働の中に埋没しているかどうかどれだけ生産労働から解放されているか、どれだけ集団（あるいは伝統的な共同体）や自然の中から分離しているかという基準から見た区別である。しかし誤解のないように予めいっておけば、集団からの分離は、同時に個人の社会（市民社会）への観念上での接近とは同義ではない。具体的・抽象的とは集団や自然との様々の交渉（共同の労働過程による）のうちに集積される諸々の体験からどれだけ

離れて、概念やコトバによる思考を行うか、マルクス流の表現でいえば精神労働と物質労働との分化の程度を意味している。体系・断片の区別は普遍的法則、概念的認識の構成や個別性の有無による区別であるこというまでもない。日常的・概念的とは直接の日常経験か合理的な概念か、哲学者のいう「模写」的な認識かあるいは「構成」的な認識のいずれかの区別である。非合理・合理というのは伝統や超越的なものへの畏敬に囚われるか、前論理的か論理的かの基準にもとづく。

これらの観念諸成層の間には、一方で後者が前者を素材とするいう関係の他に、たえず後者が前者によって拘束される、すなわち特定の感情は特定の感覚を、特定の意識は特定の感情を、特定の意識は特定の感情を、一定の思想は特定の意識を、特定の理論は特定の思想的立場をきそにして成立するという関係をもつことが充分注目されねばならない。これをバラバラにして、理論以下の諸次元をそれ自体として論ずることも可能であるが、それは論理的な操作としては可能であっても、本来観念のもつ論理的性格を充分にとらまえる所以ではない。この点ヘーゲルの把握は実に見事である。

これらの区別基準にもとずいて五つの成層を区別した上で、とくに広い意味での経済現象に関する観念に限定してみると、われわれは経済観念を前頁に掲げたようなシェーマに表現してみることができよう。その論理的・心理的な構成上の諸規定は以上に述べたところがその侭適用されうる。

ただしかし経済観念に限定して考える場合、若干の注意・補足が必要である。というのは経済学でとり上げる経済現象には様々の対象があり、これを整理する基準をもたないと、低次の他の観念と複雑に絡み合った経済観念をとり上げる場合、どこまでが経済感覚や経済感情や経済意識であるかが論理的に確定しえないことになろう。経済観念を経済観念として把える眼は、一種のパラドックスであるが、やはり経済学の中に求めねばならない。

まず経済環境（これには自然と社会との二つの側面がある）に対する観念のあり方が問題となる。自然といえば土地・水・海川・天恵・天災・気候など様々の要素が人間経済生活に甚大な影響をもつ。自然はまた様々の労働対象を与える。社会的な環境である様々な原始集団、共同体、市民社会のあり方によって、経済生活も大きく変ってくる。

労働過程に関しては労働力と労働手段との双方が問題になる。これについての観念は経済観念の主要な部分を構成する。労働過程の極に出てくる労働成果たる財や商品に対する観念、またこの財や商品の価値（使用価値と交換価値）、価格に関連して貨幣に対する観念、また労働が生み出す様々の剰余価値の転化形態である地代、利潤、利子やまた租税などに関する観念、したがって所有に関する観念、交換、商業、交通に関する観念、消費生活についての観念、共同体間の交換、外国との関係、全体としての社会の再生産、社会関係、階級や職業、分業に関する観念、以上の様々の観念を経済観念と呼ぶことができよう。

また経済観念は一定の環境においても、その観念の主体が富裕というものをどう把えるかによって大きく二つに違ってくる。社会全体の人々の富裕の進展を願うか、あるいは個人的富裕のみを願うかによって正反対の観念がそこに成立してくる。特定の経済現象に関する感情や意識や思想が全く対立した二つのタイプに表現されるのはこの理由に基づく。

ここまで論じてくると、次にわれわれは経済観念の歴史的・社会的側面に論を移さねばならぬことになる。

三　経済観念の歴史的・社会的側面

先に掲げた諸経済観念が単なる造語上の概念規定に基づくものではなくて、いわば具体的な思想史上の実在か

らの抽出物である理念型であることを、次に歴史を辿りつつ説明しておこう。

(A)　さて予め注意しておかねばならないが、人間を猿やその他の動物からまず最初に区別するものは、決して思惟にあるのではない。最も端緒的な思惟の材料・内容となる「感覚」を、人間は動物と共に共有しており、この点で区別を導き出すことは困難である。第一次的に人間を動物から区別するのは、何よりもまず「労働」である。「労働は人間そのものをつくり出したといわなければならないほどにまで基本的な条件である」（エンゲルス『自然弁証法』選集第一五巻二〇〇頁）。例えば猿でもある地方のゴリラ猿は柳の小枝で白蟻を地中の穴から釣ってこれを食べるという。したがってこの釣りの「道具」を用いる点で人間と同じであるといわれているが、しかしこの道具を用いる行為は個別化された採取の行為ではあるが、社会をなして労働をもって自然に働きかけることはないという点で人間と決定的に異っている。したがって、先の「道具」は「労働手段」としての意味をもたず、目的が終れば放置されてしまう。猿は自然の一部をなしており、自然に自己を対置する労働過程をもたない。

人間が立行して手を自由にするようになって以来、人間の手にはますます多くの技巧が獲得され、労働の器官として高度の完全さに到達した。手の完成、労働による自然の支配は人間の視野を拡大させ、自然物に対する諸特性の発見と、共同的な労働における協力、社会成員の相互扶助とを助けた。人間は相互にその意志を伝達するための複雑な伝達手段としての言語をもつに至る。言語の発生はこうした集団内における労働と協力との手段という観点から説明されうる。

労働と言語というもっとも本質的な衝動の影響の下で人間の脳髄は発達し、それに最も近い感覚器官（聴覚をはじめとするその他の感覚諸器官）が発達した。こうして脳および諸感覚や、しだいに明確化した意識、抽象力、推理力の発達は、逆に労働、言語の新しい発展に動機を与えた。個人的、社会的なこれらの発達は、人間に

より複雑な働き、より高い目標とそれを実現する能力を与え、他方労働は益々完全かつ多面的となった。すなわち狩猟、牧畜、農耕の他に、紡織、金属加工、製陶、航海、さらに諸種の産業が現われ、これらと並んで芸術、科学、国家、法律、政治の諸文化とともに宗教が生まれる。ここまで発達して来ると、労働それ自体ではなく、労働を計画する頭脳が優位を占めるようになり、文明、文化に尽した功績は労働にではなく、頭脳の発達と活動とに与えられ、「思惟」から説明されるようになる（以上については拙稿「思想・人間・社会」大府大経済研究第十三巻三号所収参照）。

この考察の結果生ずる帰結は重大である。なぜならば、われわれが経済観念の諸成層とよぶ諸形態は、実は人間の経済に関する観念が感覚から理論へと益々体系化、抽象化していった過程は、実は人間の思惟能力一般の向上のみからではなく、実は労働における人間の全体としての生産性の向上と労働過程の高度化、また同じことであるが、個人の集団・共同体からの自立・個別化の進展とともに歩まれた過程であることを知る。この点をまず念頭におく要がある。つまり経済思想や経済理論への体系化の地盤には、生産労働の多様化と高度化との現実、本庄博士のいわゆる「社会の発展・経済生活の進歩」があることで、その逆に一国への経済思想や経済理論の輸入が直ちにその国の経済の近代化や労働生産性の高度化を招来しうるものでないことが後述と関連してここで確認されねばならない。

さて、この人類の最も原始的で血縁的な原始共同態的社会生活における集団的労働は、まず最初は猿と程近く、もっぱら天然のままに生育する出来合いの動・植物性の生活資料の採取・捕獲・狩猟・漁撈に始まる、いわゆる採集経済、あるいは狩猟・漁撈の経済がそれである。この時期にもずい分長い時間を要したことは想像に難くないが、おしなべて、この時期の経済生活の下では生活資料の豊富か否かは、人間の労働の大いさよりも、むしろ偶然のめぐり合せか、あるいは自然の諸条件に依存していることが大きい。人間の採集、狩漁の労働の成果は

全く外部の自然条件、すなわち人間にとってはどうすることも出来ない自然の恣意、あるいは自然を動かす大きな霊の力によって左右される。人間はその労働成果、生活資料の豊かさを確保しようとすれば、様々な呪術、儀礼によって生産の成功をただひたすら祈り、また労働対象である自然、大地、海、河川、湖沼や獣、魚、植物など、さらに労働手段である漁撈、狩猟の道具や経験を経た老人や名手の直感力に呪力を認め、これらを崇敬、畏怖する他はなかった。タブーといわれる諸々の禁忌もそのような呪術、畏怖の表現であった。そして呪術、儀礼、習俗などは一つの「集団的表象」として現われ、およそ「論理」以前の「前論理的」な「融即律」（すなわち自分達と動・植物を同一視したり、凶事と時間的・空間的に近い異常な経験とを結びつけたりする）に支配される（レヴイ・ブリュル『未開社会の思惟』上、一六一頁、岩波文庫版）。分析の立場を含み、矛盾律を全面的に排斥する近代的な論理の立場から見れば、それらが「迷信」などと称されるのは当然であるが、人間の観念、とくに経済観念の発端は、まずこの「迷信」、すなわち呪術、民間信仰、自然宗教あるいは習俗などにあった。この本能的で衝動的な自然に対する人間の経済関係を支配する観念を、われわれは「経済感覚」と名付ける。

この場合でも、既に人類は普遍化かつ抽象化の作用さえもつ言語と比較的多数の事物をかぞえる数量的力能をもっているけれども、抽象も普遍も神秘的可能性の雰囲気の中に埋没し、独特の方法で容易に数えうる総体を離れては数の必要はさまでない。語や数にさえ神秘的な力があると考えられる。そこでこれらの「経済感覚」を知るためには、われわれは迷信や禁忌という慣習、習俗や神話や民間伝承、生産に関する民間芸能、民謡、民話など様々の源泉からそれらを類推する他はない。もちろん未開社会、原始社会に関する人類学の諸研究が援用されねばならないだろう。

次いで人類はこうした最も低度の労働生産の段階から、継続的な動物の飼養を行う放牧の段階に達し、さらに

一定の大地の部分を占取して、家畜の飼料と自分達の食料としての穀物その他を生産する農耕を営むに至る。すなわち自然の動物を飼養・繁殖させて食肉や衣料をとり、そのために多数の家畜群用の飼料や自らの食料としての穀物・野菜などを栽培する。この場合にも家畜や農耕用土地の占取の主体は、もちろん主として血縁的な原始共同態を中核とする種族共同態である。個人が家畜や土地を私的に占取・所有することはありえない。それほど労働生産性は、なお集団としての共同態を前提とせなければならぬほど低度であるし、社会的分業も単に性別、年令別の分業の域を出ない。しかしかって出来合いの自然のままの生活資料を採集・取得していた時期と異り、農耕は激しい労働を必要とすること、人口が増大するに伴う生活の困難は、人間に生産労働の苦しみを教える。その上、右の共同態の内に、労働要具の私的占取、家畜や「生産された労働要具」の男性への集中がみられる。これはさきほどあげた男女間の分業や老幼間の分業という最も端緒的な分業の発生（＝生産力向上の端緒）と密接に結付いている。かくして原始的な種族共同態の中に、いわゆる家父長制的家族共同体が出現し、これを基本にして家父長制的な種族共同体が成立する。もちろん農耕と牧畜との分離だけでなく、青銅器や鉄器が、かっての石器に代って登場し、いわば手工業としても独立する。人類はここで未開野蛮な原始状態から、いわば文明の初期の段階に入り込み、最初の「英雄時代」を迎える。この時期には、とくに英雄を中心とする「神話」や最も幼稚な「歴史書」さえ編まれたり、記念碑が残される。

この場合、土地は必ず共同体的に占取・所有されるけれども、共同体成員諸個人の私的活動の恣意性（上述の家畜・労働要具の私的占取にもとづく）は、共同体全体の基本性格と矛盾し（固有の二元性）、共同体によって抑制されること（共同態的規制）が必要となる。この規制の言語的・観念的表現が「神話」である。そしてそれは生産労働の様式から生活全般に対する強い規制、禁忌を伴いながら共同体全体を束縛する外枠となる。他方で

はそれは、既に共同体の真只中に現われる「個」の存在を表現している。この「個」は共同体の経済全体に対する自分の関係において一定の「感情」をもっており、またこれに対して共同体の集団としての生活律動が強く対立する。

ここではかっての自然の精霊や呪力は個別化され、特定の家族共同態の祖神であるとか、血縁をもって結ばれた種族の祖宗神としての性格を帯びはじめる。「神話は、社会集団の、その過去との、また囲繞存在の諸集団との連帯感の表現であり、この連帯感を支持し、再生させる手段である」（ブリュル前掲邦訳下、一七九頁）というブリュルの語は誠に適確である。神話は民族を構成する諸種族の生活実感なり、生活感情を端的に表現し、経済的な実感、感情もそこに充分把握しうる。「原始神話と原始宗教は、まさに原始人が労働の中から発展し、日ましに賢さを加えて来た頭脳によって創造してきたものであり、またまさに原始社会の低い生産力の一反映なのである。……神話は実質において人間の物語である」（袁珂『中国古代神話』上、一七、二〇頁）。こうした段階における民族の経済生活における人間感情の表白を、われわれは「経済感情」の最初の表現とみる。もちろん「経済感情」は集団と個との経済的緊張関係がみられるところには必ず現われるのであって、神話時代だけでなく、中世にまでも尾を引くものである。そのような感情を知るための資料として、われわれは民話や民謡や、伝承、民譚、俚諺、慣行、史書など凡ゆるものを動員せなければならない。

次いで土地を基軸にする農業共同体の種々の形態が展開するが、これは漸次に発展していく社会的分業（＝生産力）の進展に照応・適合する共同体諸形態（とりわけ生産成果としての財産の所有関係）の継起的な展開に他ならない。通常、経済史家の与えるこれらの土地所有に関する共同体諸形態は、①アジア的、②古典古代的、③ゲルマン的（あるいは封建的）な諸形態である。これらの表現は、それらの土地所有形態が典型的にはそれらの

地域に見られるのでかく名付けるのであって、ケルトの古い土地所有がアジア的形態であり、日本の徳川時代のそれが「ゲルマン的」であっても一向差支えない。ただ歴史的発展の度合いから見て、第三のものは第二より、第二の形態は第一の形態よりも土地占取（ないし所有）の私的な要因がより強くなっており、これに伴って共同体による規制は漸次より緩やかになっており、共同体の崩壊程度の進行という意味で近代の資本主義社会へより近く位置している。

経済観念の点からみると、私的な経済生活の要因が共同体の臍の緒から断ち切られながら自らを独立させていくに伴い、自然との関係からも自らを切離し、私的、個人的な「経済意識」をより強くもち、自らの私的な意見や態度を明確に意識するようになる。ここでは経済感覚や経済感情という感覚や情緒にもとづく経済観念ではなく、それらに対抗して私的で明確な経済に関する意見が提出されるようになる。とはいえ、それが経済問題に関する行動・運動に発展するような思想にまで高められることはない。文学・古記録などに経済意識の痕跡を示す。経済思想がもたれるのは、このような土地所有形態に基づく共同体が崩壊する過程と、近代的な資本主義社会、すなわち貨幣と商品とが土地所有の比重にとって代る時期に成立して来る。経済社会の転換期、変革期においてはじめて人々は経済社会の包括的な把握や経済的世界観、すなわち「経済思想」をもちうるのであって、貨幣を中心にする経済的世界観が近世の社会にのみ特有なのはこの理由に基づく。もちろん「経済意識」、時には「経済感情」さえ何らかの形において残存するけれども、このような経済社会の把握は商品生産者たる農民・手工業者、あるいは商人達が共同体の社会的束縛から解放されて、私的富の蓄積と増大とを専ら追求する経済活動に向う時にのみ成立することをここで銘記したい。

最後に経済理論の成立は、やはり近代資本主義社会が成立した時にはじめて可能であり、特にその資本主義社

会が新な困難に逢着すると、社会に対する反省は極めて論理的、法則的な認識の性質をおびる。その上、近代資本主義社会における尨大な生産力の発展によって、肉体労働と精神労働との分離が可能となり、一群の経済学者が輩出され、はじめは資本家の、後には労働者の立場から資本主義社会の科学的分析に向うという新な事態が発生する。「経済理論」の成立とともに、経済学は近代社会のみならず、近代以前の諸社会をも分析しうる理論的手段を駆使しうるに至る。言語のもつ抽象的推理力、概念構成の力能の発達はここで最高の発達をとげ、経済観念は一群の経済学者の間において、最高度の体系をもつことになり、社会の経済生活全体に対する法則的認識が成立する。かくて経済観念はその最高の段階に到達し、これと並んで存する諸々の経済思想や経済意識に対して方向を設定し、それを指導する科学的な力に転化する。

こう見て来ると、経済感覚から経済理論への上昇のプロセスは、労働生産力の発展（＝社会的分業の発達）や個人の集団からの離脱によって裏付けられた人間の経済観念の進歩発達と正に同義である。誤解を恐れずにいえば、経済感覚から経済理論への歴史的移行は一方では、伝統的な血縁的集団からの個人の離脱の過程であると同時に、他方でそれは個人の経済社会（＝市民社会）に対する客観的な態度・アプローチの過程であって、一方で社会（共同社会）からの実質的隔遠が、他方では社会（利益社会）への観念的接近が見られる。しかし、それは単に直線的な上昇ではなく、経済社会環境の変動に支えられた複雑な進行であり、決して後段に立つ観念が前段階にあるそれを単線的に否定、交代していく過程ではなく、常に低次元の観念を伴いつつ、高次元の経済観念が出現するという現実が存する。今日においてさえ経済理論とともに、経済感覚がなお国民経済生活の片隅に残存している事例は何れの国と雖も見られるのである。ただ高次の経済観念がどの程度、一国の国民の経済観念にとって構成的な意味をもっているかによって、各国の特殊な観念的状況が異って来るのである。日本の場合それが

どうなっているかがここでの関心事である。

それはともかく、われわれがここでいいたいのは、経済感覚という最低次の経済観念と最高次の経済理論との間には、単なる論理的体系性の差だけでなく、それを支える社会的経済環境の差が存するということである。先述の丸山氏が低次の観念が高次のものに対してエネルギーを与えるというのは、低次のものほど生活に密着した経済観念であり、具体的であるだけに、理論や思想のもつ抽象的・包括的・普遍的な性格を裏打ちする強さをもっているという意味に解しうるし、高次の観念が低次のそれに目的を与えうるというのは、抽象的であるが、先進的で包括的なだけに具体的・特殊なより低い経済観念の意義・地位を見通す能力を有することを意味すると解せられる。ただこの丸山氏の発言も、日本の経済観念の諸形態について適用する場合、様々の限定を設けねばならぬこと後述の如くである。

さて次にわれわれは、経済諸観念と階級ないし社会層との関連をとり上げねばならないであろう。けだしわれわれは経済観念を単に論理的＝心理的に解釈するだけでなく、既に上述したように経済生活環境との関連において歴史的・社会的に見ているのであるから、とくにその諸観念を抱く人間、しかも個人ではなく、社会層や階級の中における人間との関連において見る要がある。必ずしもここでそういうことを指摘するのは場所が適当でないが、われわれは文化を基本的に、思想的な部分（宗教・芸術・学問・道徳・法など）と社会的な部分（政治・経済）とに分けるが、これを統括するものが文化のトレーガーである人間＝社会層または階級であると考えている（拙稿「思想・人間・社会」大府大経研第十三巻第三号所収）のであって、経済観念もいわば文化の思想的部分に属しており、人間＝社会層あるいは階級との関連を抜きにして論じえられないと確信するのである（この点は拙稿「市民階級」ヨーロッパ近代文化研究会報告一九六七年度所収）。

(B) これまでのところ、われわれは経済諸観念が論理的・歴史的にもつ性格を論じたが、もう一つ重要な性格

は、それらの諸観念が抽象的な個人の頭脳中における表象としてではなくて、現実の社会に経済生活を営む生きた諸個人の現実的経済生活への反応（それぞれ感覚的・感情的・意識的・思想的・理論的な）の仕方であるということである。したがって、そうした諸観念がいかなる諸個人のいかなる経済的現実への反応であるかここで更に立入って論ぜられねばならない。たとえば、新聞の投書欄を見ていると、同じ特定の米価決定について、同じく「農民」という職業を付記しながら、甲・乙二人の人間は、全く異った反応を示し、一方はこんな低い生産者価格では農民経営は立行かぬと論ずるし、他方はこれで充分採算はとれると主張する。同じ現象について同一の階層から異った経済意識が表明される。このことは経済意識それ自体の性格に基づくのではなく、明かに「農民」にも様々な階層がありうるし、その階層の差が意識の差を生んでいることに、いいかえれば経済意識と社会層・階級との関連の仕方に基づいている。これをリンゴとナシとどちらが好きかというような場合と同様に単なる個人的意見の相違に解消し去ることは出来ない（リンゴとナシそとの選択さえその人の環境や、生活が大きな要因となる場合もありうる）。まず、人間の文化なり、歴史の第一次的不可欠の前提は現実の生きた諸個人の生存という事実である。これらの諸個人が肉体をもち、自然に対して物質的生活の上で関係（採取から生産にいたる）を取結ぶというのが第一次的な事態である。肉体組織の性質や自然の諸条件（地質・風土・気候・温度等々）は「与えられてある」ものであり、またわれわれの考察の範囲をこえる。ともかくこの与えられた人間の自然的存在と自然的諸条件、いいかえれば「自然的基礎」と歴史、文化の過程において人間がその行動（とくに生産労働と技術）によってこれらの自然的基礎を変更するという事実、この二つのものが一切の歴史的叙述の出発点である。これは同時にわれわれのいう経済観念がなにゆえ経済感覚をもって始められたかを示す。けだし、人間の経済観念はまず自らの与えられた感官をもって、「自然的基礎」を見出し、その自然的諸条件を利用する感覚的反

応として現われざるをえないからである。

さて、この生産労働はまず人間の手や肉体的、精神的な力能によって制約されているという意味で、いわば自らの肉体的組織によって制約されている行為である（したがって、経済観念も感覚の域を出ない）が、人間は様々な生産手段＝労働要具を作り出し、この制約から漸次自己を解放する（経済観念の感覚からの解放、感情的・意識的諸観念への移行を可能にする）。人間は生活資料と生産手段、総じて生活手段を生産することによって、間接に自らの物質的生活自体を生産する訳である。

この人間が自らの生活手段を生産する際にとる様式は、単に諸個人の肉体的生存の再生産という観点だけでなく、それが諸個人の活動、生活を表現する「生活様式」であるという観点からも見られねばならぬ。この「生活様式」とは、諸個人の存在の仕方、諸個人の何ものたるかを意味し、したがって諸個人の何たるかは彼等の生産の物質的諸条件に依存している。

ところで一国内の諸個人の関係は、彼等の有する生産諸力、分業、相互の交通の発展度に依存している。生産諸力の発展度は分業の発展度によって示されるが、この分業の発展を労働成果の取得の側から見れば、所有関係の進展度と正に一つであって、分業の程度は労働対象、労働手段、生産物に対する個人相互間の関係を規定する。この関係がいわゆる「階級」関係であって、これを中核にして特定の社会的・政治的諸関係が結ばれる。こうして一国の社会的編成や国家は一定の諸個人の生活過程から生まれる。以上でわれわれは「文化の社会的部分」が所有の関係＝階級関係を中核としていることを説明した。

次に、いわゆる「思想」や「意識」、われわれの表現を用いれば、「文化の思想的部分」が諸個人の生活過程、とりわけ社会的階級関係とどう結びついているかを見よう。まず、各種の理念、表象、意識の生産は、前にも見

たように人間の物質的活動（とくに生産的労働）及び現実生活の表現である物質的な交通の内で直接行われる。人間の表象作用、思惟作用、精神的交通は、その物質的行動の直接の流出といってよい（言語と生産における人間の相互協力との関連を想起!!）。この議論を法律・道徳・宗教・学問等々の精神的生産に拡大しても、先述の説明にしたがい、やはり人間の物質的行動の流出なのだといえる。すなわち一定の生産諸力とこれに照応する交通との一定の発展によって制約されている、現実の行動しつつある人間こそ、その諸表象、諸理念、あるいはここでとりあげている経済諸観念を含む「文化の思想的部分」の生産者である。したがって諸観念は「観念的な存在」、すなわち人間の現実的な生活過程についての観念なのである。経済的諸観念を単に個人のみの観点から取上げえない理由もここにある。経済的諸観念は、感覚的なものをも含めて、すでに諸個人の現実的な生活過程、とくにその諸個人のおかれた社会的階級関係のイデオロギー的反映の一ということになる。とりわけそれが経済意識から、経済思想、経済理論に至るプロセスではっきりとして来る。

さきほどの例であげたように、諸観念の成層の内部や成層間、あるいは諸経済観念と現実の社会諸関係との間に矛盾が存する場合は、それは社会的生産諸関係が現存の生産力と矛盾に陥っているという場合を示している。また日本の経済学の歴史が示しているように、その経済学理論や思想の大半が外来のものであるという場合には、自国の経済的実践や経済的現実と外国の経済思想や経済理論との間に、すなわち経済意識以下の諸次元と思想以上の諸次元との間に矛盾やズレが存する時にも経済構造の上に大きな不均衡があることを示している。このような矛盾や不均衡が経済観念における不均衡、混乱を来たす要因となっているのである。そして経済構造上の矛盾や不均衡の人間的表現としては、社会における諸階層間の対立・抗争あるいは斗争という形をとる訳で、その社会的諸階層の意識、表象における反映が、経済諸観念の様々な姿になって現象する。したがって経済諸観念の成

層・次元・あるいは同一問題に対する同一次元内での異った反応の仕方は、この社会階層、あるいは階級の細かで具体的な分析によってのみ説明の手段を与えられうるのである。

われわれは思想一般について、マックス・ウェーバーの宗教社会学におけるすぐれた分析によって、宗教倫理（思想と読みかえてよい）と社会層あるいは階級との結合あるいは照応の仕方に様々な示唆を与えられている。それによると、「農民層」das Bauerntum は、経済的状態が直接自然の諸条件に結び付けられており、そのため自然の諸力やそのうちにひそむ精霊への信仰、一般に呪術へ固着する傾向が強い。例外的な場合を除いて、一般的にはいつまでも呪術的信仰のうちに停滞し、伝統主義の本来の基盤を形づくる。これは明かに農民や狩猟民、漁撈民あるいは自然に依存することの強い社会層は、われわれが経済感覚と呼ぶ観念形態の次元に止まることが多いという傾向を示唆する。たかだか彼等の革新的な運動も経済感情に結びつくにすぎない。しかし稀には農民戦争や百姓一揆の際に見られたような、経済意識の諸主張を提出することもありうるが、ここまで成長した農民層はむしろ後出の「市民層」に近くなる。

次に「騎士的戦士層」（または未だ官僚化されていない広義の封建貴族層）die ritterliche Kriegerschicht はいつも死と運命との非合理の前にさらされているため、その運命をともに支えてくれる神々や身分に相応しい儀礼はわきまえているが、その関心は徹頭徹尾現世的である。したがって究極的に伝統主義的であるといわれる。経済的にいえば、彼等もある種の非合理性の前に立っているから経済観念のあり方も感情的である。農民のように、自然諸力と直接結びついていないので、大して感覚的ではないが、農民層の生産成果に依存している面で感覚的である側面もあろう。それよりはそうした生活基盤に対する経済意識や経済思想さえ主張する場合もある訳であるが、しかし彼等は到底それを理論化する方向はもちえない。

次に「政治的官僚層」das politistische Beamtentum oder die Bürokratie ―― 近代以前のいわば役人層を含めて――は一般に秩序と治安の理想を絶対的な価値尺度とするため、現世的目的をこえるような努力を軽蔑する、冷静な合理主義の担い手となり、結局伝統主義に結びつく。彼らの経済的観念はたかだか意識以上には超えず、その経済思想も現実の生活環境の固定化を目指すものにすぎぬ。理論を要求する場合も、単にこれを経済秩序の固定、維持を目的とする政策の弁護として要求するまでである。この政治的官僚層の精神的状況は、後に日本の経済学者の社会的・身分的地位や教養を考える場合にも、また新しい現代官僚層と経済学理論との結びつきを考察する場合にも重要な論点となるであろう。けだし、とくに前の場合は日本の経済学は少数の例外を除けば、官僚養成を目指す大学の出身者で、かつ官僚的身分を兼ね備える大学教授によって担われ、かつ発展せしめられた事情があるからである。

これに関して、次に「知識人層」die Intellektuellenschicht の役割が問題になろう。けだし経済理論を支える唯一の社会層こそ、この層に他ならないからである。知識人層は物質的＝観念的な利害状況によって推進される人々の動きの究極の意味を教示するような合理的な世界像（神義論）を創出し、それに基づいて現世を批判・拒否して人々の動きの方向を転換させるという知的作業を行う。この合理的な世界像と現世批判の態様、性格は知識人の出自と彼らの置かれている社会層分化の状況とによって決定される。

たとえば、歴史的には知識人層は祭司 Priestentum さらに禁欲僧 Mönchtum から出自する、というよりは彼ら自らがこれらの独自な社会層を形成して教養を独占する。しかしこの教養は、非軍事化された「貴族」その他の特権層、「庶民」とりわけ「小市民層」Kleinbürgertum、さいごには「大衆」の中に拡がり、「知識人層」は他の社会層の一部になってしまう。ところが知識人層が他から離れて独自な社会層を形成する場合には、彼ら

の生み出す世界像は自然の合理的認識と彼岸の「神秘的体験」とに分裂する。一方において現世は「非人格的な法に支配されるコスモス」として合理的に認識されるが、他方、現世の背後に存在する国土、しかもそれは語には表現し難い内容をもつものが神秘的に体験され、そして世界はこの両者の相即というふうに把握される。行動する人格神の姿がそこには考えられていないから、現世拒否の方向も、最高の存在たる法との神秘的合一という観想的体験の上に立つ「神秘論」的冥想に向かうことになる。

ここでわれわれにとって重要な帰結が生まれて来る。すぐれたウェーバー研究者の語をその侭借用すれば、このような「神秘的体験はすぐれて孤独で、非日常的なものであり、むしろ非日常的であるがゆえに神聖なものとされるのがつねである。そこで『知識人層』と彼ら以外の、とくに直接に経済生活をささえる社会諸層とのあいだには、おのずから間隙が生まれ、日常的な生活をささえる社会体制への変革的作用もきわめてよわくなるばかりか、かえって『経済に敵対的な』wirtschaftsfeindlich 性格を帯びて強力な保守作用をもつようにさえなりうる」（大塚久雄「宗教社会学と経済社会学との相異」大塚、安藤、内田、住谷編『マックスウェーバー研究』二四九頁）。この場合、「間隙」の指摘は日本における経済意識以下と経済思想以上の、後述するはずの「断絶」を示唆しているばかりでなく、日本の知識人＝経済学者の経済研究態度を非日常的、保守的ならしめる社会的要因を鋭く突いている。

最後に、「市民層」das Bürgertum は歴史上ほとんどの時代に見られるし、それゆえその宗教意識のあり方も多種多様であるが、このうち「大市民層」die Großkaufleute は富裕化すると土地を買収して貴族化し、さらに商人化した本来の領主的貴族と一緒になって「都市貴族層」das Patriziat を形造る。この層を含めた「大商人層」（現代の大ブルジョアジーも）は宗教的なもの（あるいは現世改革的なもの）に対する懐疑と無関心の態度（いわゆる商人的唯物論 kaufmännscher Materialismus）を示し、現世拒否への内面的緊張を欠き、日常生活

において伝統主義に結びつく。次に「小市民層」das Kleinbürgertum の宗教意識は恐ろしく複雑であるが、とくに「農民層」に比べて見た場合、その経済生活が交換の上に立っているため、合理的で計算的であり、目的合理的な方向に立つ。したがって行動的な人格神の信仰に支えられた救済的宗教意識、あるいは現世改造の合理的な意識へ移り行く傾向を強く示す。もちろん小市民層も、社会的な分業の低度な段階では呪術的な意識に包まれる場合もあるが、いったん条件が好転すれば、経済生活上の理由から右のような合理的宗教意識の担い手となり、これを他の社会諸層に拡大し、「現世の呪術からの解放」die Entzauberung der Welt の変革運動の中核体となる可能性をもつ（以上大塚前掲論文）。

この分析からすれば市民層も様々な経済感覚、感情、思想をもつことが考えられるが、最後にはその合理性のゆえに、自らの層の中の知識人的要素に働きかけて現世に関する合理的な経済理論を生み出す可能性さえ孕む社会層であるといえる。このような論点についてはさらにマルクスの鋭利な分析が接続している訳で、次にその側面から突込んで考察してみよう。

マルクスは、ウェーバーが社会層とその宗教意識との照応として扱った問題を、「人間は彼等の諸表象、諸理念等々の生産者である」が、その人間の「現実的な生活過程」が問題の核必であることを指摘する（唯研訳イデオロギー一五頁）。経済諸観念を含めて、「諸々の意識形態は……なんらの歴史をもたないし、それらのものはなんらの発展をもたずして、むしろ物質的生産と物質的交通とを発展せしめつつある人間が、彼等のかかる現実と一緒に、彼等の思惟や思惟の諸生産物を変更するのである。意識が生活を規定するのではなくて、かえって生活が意識を規定する」（同上訳一六頁）。すなわち彼によれば「精神は元来物質に憑かれているという呪われたる運命を担っている」のである。

ところで「意識（観念と読む）は最初は、最も手近かな感性的な環境についての意識」であり、「それは同時に自然についての意識…、自然についての純動物的な意識（自然宗教）」である（同上二七頁）。これはわれわれのいう「感覚」であるが、このさい一方で「自然に対する人間の局限された関係が彼等相互の局限された関係を制約し、また彼等相互間の局限された関係が自然に対する彼等の局限された関係を制約するという『自然と人間との同一性』と、他方『自分がともかく一個の社会のうちに生活しているのだという意識の端緒』、すなわち『単なる群意識』とが強く現われる。」

この端緒的な意識が「感覚」の領分から「感情」を経て、われわれのいわゆる「意識」に到達しうる契機は、分業を現実的なものたらしめる物質的労働と精神的労働との分化である。これは同時にウェーバーのいう「知識人層」の「農民層」、「市民層」等々に対する発生とさらに拡延の過程に他ならないが、この場合、理論や思想はもちろん感情、意識さえも、その時代における「支配的な階級」の性格によって規定されざるをえない。なぜなら「支配的な思想とは……一の階級を支配的ならしめるところの諸関係の観念的な表現以外の……何物でもない」からである。「支配階級を構成している個人は、なかんずく意識をも有しており、それゆえに思惟する。したがってとくに思惟する者としても諸思想の生産者としても支配し、彼等の時代の思想の生産及び分配を統制する。……彼等の思想がその時代の支配的な思想である。」そして「従来の歴史の主要な力の一つとして見出したところの分業は、今やまた支配階級のもとにおいても精神的労働と物質的労働との分業として現われ、かくてこの階級の内部においてその一部分はこの階級の思想家（この階級が自分自身について抱く幻想をば育成することを主要な生業としているところの、この階級のために、能動的に立案するところのイデオローグ）として立ち現われる。しかるに他の部分はこれらの思想や幻想に対してヨリ多く受動的かつ受容的な態度をとる」（同上四二頁）。

ここに思想や理論の抽象性・体系性にもかかわらず、そこに貫かれる社会的刻印の意味が指摘されている。ウェーバーが「小市民層」について現世拒否の態度が生まれるか否かは社会的分化の程度と諸条件とによって規定されると説くところを、マルクスは一般的に「一定の時代における革命的な諸思想の存在は既に一の革命的階級の存在を前提とする」（同上四三頁）と説明している。さらにマルクスは続けて、「支配階級の諸思想を支配階級から切離し、…思想の根柢に横わる個人たちや世情を省略してしまうならば、例えば貴族が支配していた時代には名誉・忠節などの諸概念が、ブルジョアジーの支配の時には自由・平等などの諸概念が支配したということが出来る」（同四三頁）という。ウェーバーの先述の宗教社会学的分析がこれに相当するかの如く見えるが、しかしウェーバーの分析はもっと細密であり、とりわけ歴史変革のダイナミズムを重要な要因として考慮に入れており、いわば意識的に「社会学的」方法をとっているにすぎないといえる。

そこで、先にわれわれが引用した丸山氏による思想の諸観念成層についての言及を想起してほしい。上にいくにしたがって体系的・抽象的となり、下にいくにしたがって断片的、日常的となるというあの成層の論理構造を、マルクスはここでは歴史的に説明する。「十八世紀以来すべての歴史家に共通しているかような史観は必然的に、たえずヨリ抽象的な思想が、すなわちたえず益々普遍性の形態（これを理論的・体系的と読め――西村）をとっていくところの思想が支配するという現象に突きるだろう」（同上四三頁）。ここでは諸観念の単なるレベルと考えられていた関連が、歴史的な社会関連の基礎から説明されており、われわれが経済諸観念を分析する場合の基礎視角に大きな示唆を与える。

もしこうした基礎視角をとらないとすれば、どういう経済諸観念の扱い方が生ずるか。これについてもマルクスはヘーゲルの思想の把握の仕方を批判しつつ、支配的な思想を社会的諸関係から分離し、歴史において常に思想

が支配するという結論が出来上ったうえは、凡ての概念・思想を自己発展する概念の諸々の自己規定として捉えることは極めて容易だと批判したのち（四四頁）、「歴史において精神の主権を立証しようとする芸当は、高々次のごとき三つの手練に帰着するだけである。」すなわち

①「歴史における思想あるいは幻想の支配を承認する」

②「継起する支配的な思想の間の神秘的な関連を立証せねばならない。これはこれらの思想が『概念の諸々の自己規定』として捉えられることによって成就される」が、そう出来るのは、実は「これらの思想が自らの経験的基礎の媒介によって現実に相互に関連している」からであり、単なる思想として捉えられたそのままで、恰も思惟による自己規定として考えうるからである。

③「自己規定」という神秘的な外見を取除くためには、その概念を「歴史における『概念』を代表するところの諸人格の一系列に、『思想家たち』、『哲学者たち』、イデオローグたちに変える」（以上四四―四六頁）。

ここでのマルクスの分析は、ヘーゲルとウェーバーとの方法のちがい、あるいは従来の日本経済思想史における方法の欠陥、さらに一般に「思想史」の方法における最も基本的な問題点をいかんなく抉りとっている。まずウェーバーはヘーゲルと異って弁証法をとらないけれども、宗教意識と社会層との関連・照応を考察することによって、マルクスのいわゆる「思想の経験的な基礎の媒介」を明白にする作業の観点を与えているのであり、ヘーゲルの「流出論的」手法（拙著『経済学体系と歴史』）から免がれている。また従来の日本経済思想史（あるいは日本経済学史）もほぼ思想家や学者の「諸人格の一系列」に傾きがちであり、われわれの経済観念の分析がそれらをいわば「経験的基礎の媒介関係において現実に相互に関連する」ものとして進められねばならぬ必要をここで強調したい。丸山氏の『思想史の方法と対象』中に論ぜられた「思想史の考え方」も論理的ではあるが、歴史的な観点をさら

に一枚加えなければならぬことを痛感する。つまり論理的な＝歴史的方法への省察が欠けている。

以上のウェーバー、マルクスについての諸考察から、われわれは日本人の経済観念に関する研究の基礎的視角について多くを学ぶことができるが、とりわけここで重要なのは諸観念をその社会層や階級との現実的な関連において把握する視角である。これはいくら主張してもしすぎることはあるまい。この観点は、更に現実的な相互連関の契機を明白にしうるばかりでなく、とりわけわれわれが次項において問題にする「断絶」（ウェーバーの「間隙」）をも明白にするからである。

四　経済諸観念間、とくに経済意識以下と経済思想以上との間の断絶

さて上記の経済諸観念、すなわち経済感覚、経済感情、経済意識、経済思想、経済理論の五個の成層間には、それぞれ論理的な社会的な連関があるが、逆にそれらの間には境界があり、その境界が大きい場合には「断絶」ともいわれうる分離の関係があることを次に問題にせねばならない。とりわけ経済感覚と経済意識と経済理論との三つの経済観念に大別した場合、その断絶関係は明白である。すなわち個人が共同体社会（原始集団）に埋没しているような状況下に抱かれる経済感覚と、個人が共同体社会から一応孤立して、自らの経済利害を主張する場合に見られる経済意識と、個人が社会をその運動法則において客観的に把握しようとする経済理論とでは、経済観念の主体たる人間の社会に対する関係は明白な区別を示している。つまり個人の社会に対する関係から見て経済観念は「主客未分」、「主観的」、「客観的」と特徴づけられるような明白に質的な差異を見せる。経済問題についての経済観念はそれぞれはっきり区別されうる。とりわけ、共同体の存在、残存の時期と共同体崩壊後に現

われる近代社会の時期との区別は、経済意識以下の経済観念をそれ以上、すなわち思想と理論との区別・断絶として現われる。これは歴史、とくに経済史の上における社会的変革によって起る断絶といえるであろう。

ところでこの断絶の傾向は、日本のような特殊で後進的な社会ではヨリ尖鋭な形をとる傾向がある。というのは、前時代的な遺制がなお根深く残存していて、農民、手工業者の間に経済感覚あるいは感情に属する様々な観念が残存する場合には、経済意識さえなお成立しえないという経済分野が、近代的なウクラードにおける意識や理論とともに併立する訳で、この併立した両生産様式の間には容易にこえ難い溝が生ずるし、またたとえ外形は「近代的」であるかの如く見えるけれども、単にウェーバーのいわゆる「商人的唯物論」と呼ばれるような意識の優勢な生産様式が強固に存する場合、とくに学者によって諸先進諸国から輸入された経済理論との間には明確な断絶が介在することになる。経済理論は意識や感覚の後れを「啓蒙」する役割を果そうとするのであるが、しかし後者からの頑強な抵抗を受け、また理論自体も逆にこの断絶をかえってより大きくする結果さえ齎す。だがこの問題は後に詳細に展開されるはずである。日本における民俗学の成果の中に、「晴れ」と「褻」とを区別して、前者を村の外部との交流における生活と考え、後者を日常の生産と衣食住を中心とする生活とする考え方があるが、これは経済観念における右の断絶を解明しようとする場合重要な意味を帯びてくる。

思想とか学説とかいわれるものは、いわば「晴れ」(あるいはタテマエのロジック)であり、意識以下の観念は「褻」すなわち日常生活に関するホンネの感覚、感情、意識である。集団としての村の日常生活から脱脚して都市に住むインテリ層が外来の学説や思想を攻究していく場合、殆んど「晴れ」=タテマエの観念に終始して一向不都合はないが、村の生活に埋没し、あるいは何らかその生活に連りをもつ人々の間では「褻」の生活における観念のあり方がより重大である。したがって、この「断絶」は日本では必然的な起源をもち、容易に埋め難い広

がりをもっているものである。

さらに、堀一郎氏によれば、「心ある知識人も都市生活者も、静かに自己の日常の内面生活を振返って見れば多分に前代信仰の残留を或は情緒とし、慣習とし、感情として継承保有している。……次元と質とを異にした文化も、それが一貫した生活態度の中に積極的に摂受せられてこそ始めて我々の文化となる。然らざればそは一種の精神的技術的な屈服であり、敗北であり、或は単なる上部模倣と紛飾たるに過ぎないであろう」（堀一郎『我が国民間信仰史の研究』一六頁(一)）というが、われわれのいう「断絶」もまさにこうした屈服、敗北、上部模倣、紛飾を指すのである。

次にこの断絶については、右の日本に関する指摘からも判るように、それぞれの社会層間の断絶としても把握されねばならない。最も典型的な経済感覚の主体としての「農民層」と、同じく経済意識の主体としての「市民層」と、同様に経済理論の主体としての「知識人層」(＝経済学者)の間には、物質的＝観念的利害状況の違いから生ずる社会的隔離の関係が見られる。あくまで伝統主義の日常経済生活、とくに自然に依存する生産条件を守り続けようとする農民、交換経済に立脚するため、一応そのような感覚的な保守主義から解放されている市民層、さらに現実経済生活の革新に理論によって指導的役割を果たす知識人層の違いがある。しかしこれは一応の判断であって、例えば、同じく市民層でも小市民層ともなれば、農民層と比較的近い距離に立つこととなり、農民層も小市民層に近くなって、もはや両社会層の間の解離は見られないし、また知識人層が拡大して、小市民層にまで拡がった場合、意識と理論との距離も縮少されることとなる。いわゆる大衆的教養 Masseninteellektuellen の時期に入れば、感覚・意識・理論間の断絶は著るしく埋められるであろう。

さてわれわれは次に、同一の経済観念成層内部での断絶にも眼を向けねばならないだろう。それは経済感情以上についてとくに問題になるところであるが、同一の経済問題・経済対象についての同一次元の観念でも著しく

異っていて、時には対立する場合さえ見られる。たとえば経済感情の実例でいえば、古代の荘園経済体制下で、荘園体制を満足して享受するものと、これを地獄の桎梏と考える経済感情が同一の時代に見られる場合、この二つの経済感情間の断絶あるいは対立は何によって説明せられるか。これは明かに現実の生活過程中における諸個人の地位、相対立する階級的利害関係の反映に他ならない。このことはここに例を挙げた経済感情だけについてではなく、同じく経済の意識・思想・理論についてもいいうることで、丸山氏のいわゆる観念成層の「レベル」が高次になればなるほど、抽象的・普遍的であればあるほどその対立の程度を明確化するといえる。人々は経済学について今日マルクス経済学といわゆる近代経済学との調停し難い観念的対立を眼前に見るが、これが単なる観念上の（あるいは学問方法論上の）対立・論争ではなく、現代社会の矛盾、労資の徹底的な闘争の反映であることは充分熟知している筈である。

ところで最後に、この「断絶」が経済観念の成層間、観念の主体の間及び同一次元の観念内部において見られるばかりではなく、遂には同一人格内部における経済観念の相互間における「断絶」や矛盾、撞着として現われることに注意したい。外見上この断絶は前者の第一のもの、すなわち経済観念成層間の断絶と同じ問題であって、そこに解消されて了うごとき感を与える。しかし社会的な問題と個人の人格に関する問題とでは相蔽う面もあるが、本質的に全く次元は異っている。経済観念の主体である個人がどの程度共同体から解放されているかにしたがってこの断絶の程度が異るとはいえるが、しかしここでの問題は、むしろ経済意識の主体が経済感情を同時に有する場合、また経済理論の主体たる知識人（とくに経済学者）が、実は経済意識や感情の次元までの幅広い観念成層をもつ場合に起る問題である。判り易くいえば、タテマエとしての経済意識や経済理論を抱懐する主体、個人が、現実生活の上でなお後れた生活環境に立脚しなければならぬ場合、直接生産を担当する社会層のも

つ感覚、感情、意識などのホンネを認めざるをえない、すなわち自らの生活を続けようとする限りこのタテマエとホンネの両者を使い分けねばならぬ時、そこに一人格の経済観念の成層間に矛盾・断絶が見られるはずである。例えば封建社会下の武士層間における農本主義の例をとろう。そこでは意識としては明かに農業生産力の上昇を主張しながら、なお直接生産労働をになう農民を土民視する感情を放棄することはできない。また日本経済学者がヨーロッパの合理主義的経済理論を学びつつも、あるいは唱えつつも、現実には日本の経済的現実の上に生活してその経済意識や感情の上では官僚層と異ならぬ古い保守主義を抱いている場合がある。

とりわけ、この問題は、日本の経済学、経済学者の社会的役割を取上げようとするわれわれには中心的な問題の一つである。実はこの問題は、社会的に経済理論と意識と感覚との間の断絶が個人の上に反映したものであるといえるが、同時にそれが同一個人の経済観念間の断絶として、異った次元において取上げねばならぬ必要性は、実はこの一点にかかっている。従来は、たとえば経済学者福沢諭吉の矛盾は個人福沢の経済思想における「矛盾」としてのみ取扱われるにすぎなかったが、われわれは更に突込んでこれを経済諸観念間の社会的断絶につないで理解する方法を適用せねばならない。今まではこの視点が欠けていたし、一つの盲点であった。ところで以上の議論における四つの意味の断絶について、この断絶を埋めようとする動向とそれをむしろ拡大・深化しようとする動向とがあることに序に言及しておかねばならない。断絶を埋めるというのは、明白により次元の高い観念が低い次元の観念に目的を与え、これを導くという積極的な役割を果たす場合を指す訳で、社会的運動という形をとるか、あるいは政治的指導の姿を示すか、最も高度な理論の場合には「啓蒙」という方向をとる。社会的運動は一定の目的意識をもった感情の汲み上げであって、農民戦争、農民一揆などにその著例が見られる。政治的指導としては、マーカンチリズム政策に見られるように、ある種の貿易・富思想が商工業者の活動に一定の方向を

与えることになる。啓蒙はいうまでもなく経済理論に立脚して知識人層＝経済学者が一般的社会諸層、とりわけ市民、手工業者、官民、時には政治的官僚や貴族層をも啓発し、その意識に一定の方向を設定するという作業である。

とりわけこのうちで「啓蒙」の果たす役割は大きい。日本経済学、経済学者の果たす役割も社会的運動や政治的指導よりも、むしろこの一点に重点がおかれているといえる。しかもこの日本における啓蒙は極めて特殊な形をとり、自国になかった経済理論を経済学者が外から学びとり、これを他の社会層に伝えるという作業となる。伝来の経済学理論はおろか、経済思想さえ見るべきものがなかったわが国では、そうせざるをえなかったし、またそうさせるをえない。ここでは「啓蒙」は「ほん訳」・「紹介」・「解説」に始まって、それらに終る。日本の経済学者の厖大な全体としての学問的エネルギーはここに注がれている。しかしこの啓蒙が、経済学の上でウェーバーのいわゆる「大衆的教養」の状況を帰結したかといえば決してそうでない。ごく最近、ある著名な経済学者が『経済学は難しくない』という題名の啓蒙書を書いたが、その書名が象徴しているように、経済学に関する限り、大衆的教養の時期は未だ未だ遠い将来なのである。戸坂潤がいったように「おけさほどマルクスの思想ひろがらず」どころではなく、経済学はプロ野球ほどに大衆の間に普及していないのである。つまり一語でいえば、日本の経済学者は「啓蒙」の役割も充分に果たしていないといえる。ではこの「啓蒙」の不成功は、「馬の耳」しかもたぬ大衆の側における責、原因にのみ帰すべきであろうか。いずれこの「大衆」のもつ経済感覚や意識等については次稿以下に詳細に分析するが、とくにここでは経済学的知識人の側における逆の要因、すなわち上の「断絶」を埋める「啓蒙」どころか、この「断絶」を益々強化しようとする「蒙昧化」の動向が存することにのみ言及しておきたい。これは単にわが国のみならず、諸外国の場合にも見られる現象であるが、経済学者が市民

の中にあるのでなく、とくにアカデミックな特権を有する大学人である場合には、その社会的身分なり、政治的立場、あるいは物質的利害から見て、自己の現在立脚している現体制とある程度妥協し、またそのエリートとしての地位を容易に他の社会層に開放しようとしない。したがって経済理論の啓蒙と同時に、経済理論の精緻化、厳密化の方向において経済学的教養を独占する動向をもたざるをえない。経済学は誰にでも判らねばならないが、他方専門としての経済学理論は素人には及びもつかぬ精密・難解な記号や論理で固められる。

わが国では、この傾向はもう一つ拍車がかかる。わが国の経済学者は、洋学者（外国語が読めるという意味の）であることでエリートであり、さらに学問体系の中でも最も難解な経済理論の最新の学説を教養としてもつという点でエリートである。このエリートの世界に誰でもが入り込みうることは、経済学者＝知識人には到底たえられない。啓蒙という社会的役割に生活利害がかかっているからである。したがって適当な啓蒙化と同時に、反対の「経済学の難解視」を大衆の間に普及しておかねばならない。つまり『経済学は難しくない』という書物と誰が読んでも一寸理解がつかないような『難かしい経済学』の書とが書かれねばならない。これをわれわれは「蒙昧化」と呼ぶのである。